スバ市民の生活を支えるスバ・マーケット

橋口 幸紘
（鹿児島大学人文社会科学研究科博士後期課程）

写真：スバ・マーケット

今回の調査でナイカワンガを訪問した。彼らはほぼ毎週末にスバ市のマーケットにおいて出店し、村で栽培した作物を販売している。スバに住む人の多くがそのマーケットを利用するため、活気にあふれている。

フィジーのほとんどの都市には必ずと言ってよいほどマーケットが存在する。ちょっとした交通の要衝地にも、小さいながらも似たようなマーケットを目にすることができる。これはスーパーマーケットとは異なり、日本で言うところの「市」のようなもので、数多くの出店者が所狭しと出店している。そこで売られているものは肉以外の魚、果物、野菜をはじめとした生鮮食品、スパイス、ヤンゴナの根もしくは箒など、フィジー人の日常生活に欠かせないものばかりである。

スバ市にあるマーケットはその規模がフィジーで最大だと言われている。スバ市のマーケットは、大きく分けると 2 階建てのホールのような建物部分、建物外、そして魚専門売り場から成っている。月曜から土曜までの早朝から夕方 6 時くらいまでの営業である。

このマーケットを歩いてみると面白い。出店者は様々で、フィジー系、インド系、中国系、まれにヨーロッパ系の出店者が見られ、それぞれの店では扱う商品や店の雰囲気など、明らかに異なっている。インド系の店のオーナーに雇われているフィジー系の青年の姿が見られたり、店主が外出中の際には隣の店が変わりに会計をしてくれたりもする。ある店主はマーケット周辺のスーパーマーケットと契約してキャベツを卸しており、それを運ぶために一時の間店を留守にすることもある。店番をしながら眠っている体の大きなフィジー人や、一角で寄り集まってカバを酌み交わしている店主たちも目にすることができる。店主たちは客によって言語を使い分け、英語はもちろん、フィジー語、ヒンディー語、中

国語、たまに日本語など、簡単な会話なら 1 人で多数の言語を操って商売している。客層も様々で、毎日のようにマーケットを訪れてその日の必要な品だけを買う客もいれば、大きな袋を抱えて持ちきれないほどの買い物をしていく客もいる。このような客のためにマーケットの周辺には客待ちのタクシーが巡回している。

このマーケットでは様々な商品が扱われ、フィジーで栽培された作物や民芸品をはじめ、リンゴや梨、ブドウなど、フィジー外で栽培された輸入品を扱う店もある。日本でもよく目にするような野菜や果物から、めったに目にすることのできないような不思議な野菜までも並び、また、各自の家で調理したフィジー料理や菓子を売る店さえもある。とくに、建物外の路上にも店が並ぶ金曜日と土曜日には商品の種類もかなり増え、生きたままのアヒルや蟹、貝や海草までも目にすることができる。あくまで日本と比較した場合、そして商品にもよるが、価格は安いと言えるだろう。例えば、キャベツが日本円で 1 玉 70 円、パパイヤ 1 盛(4~5 個)が 70 円程度である。(ただし季節によっても若干のずれがある)また、店にもよるが、土曜日の閉店前、夕方 5 時ごろには価格がかなり下がり、半額以下になることもある。客たちはやはり少しでも安い品を求めるようで、値段だけ聞いてその場を去っていく客や、熱心に値切る客さえ見られる。

建物の内部、外部、魚専門売り場では多少様式が異なっている。建物の外部での出店が許可されているのは金曜日と土曜日だけで、建物内で出店するためには SCC(Suva City Council)に出店場所の登録が必要である。全ての出店者は SCC の職員によって出店料を徴収される。その出店料というものは建物内 1 階と 2 階、建物外、魚売り場のそれぞれで料金が違う。例えば、建物内部 1 階部分の 1 区画(1~1.5 メートル程度のテーブルの長さ)は 1 日に 2 ドル 81 セントで、外部のある 1 区画は 3 ドル 32 セントである。建物外においても場所によって若干の値段の違いが見られるが、1 区画はほぼ 2 ドル後半から 3 ドル前半といったところである。店を出している規模によって 1 区画の店もあれば 2 区画から 3 区画の店もある。その出店数は数え切れないほど多いのだが、SCC の職員たちはほぼ 1 日かけて全ての店を回って出店料の徴収をしている。ただし、建物内の店によっては週払いや月払いの店もある。

興味深いことに、建物内部での出店者は、農業に漁業に従事していない、いわゆる小売のみの出店者がかなり見られる。彼らは早朝、マーケット周辺に作物を満載しトラックでやって来る農家などからその日に売る商品を仕入れ、価格を定めて販売する。特定の農家と契約している店もあれば、そうでない場合もあるようである。そのトラックは月曜が最も多く、中には遠方のナンディやシンガトカからのトラックさえ見られる。そして建物外部においてはほとんどが農業や漁業従事者で、各自で栽培もしくは漁獲した商品を販売している。さらに時には彼ら自身が建物内部の、小売のみの出店者に直接販売する。スバ・マーケットは、独自のスタイルを持っているのである。

このように、スバ・マーケットはスバ市民あるいは周辺の市民の生活を支えるために切り離せない存在となっている。別に商品を買わずとも、一度足を踏み入れるだけでその多

様な文化や民族性を感じ取ることができる。スバ・マーケットはフィジーの首都スバの一側面を如実に反映していると言っても良いだろう。